

自動撮影カメラによる 奄美群島の哺乳類・鳥類の分布調査

藤田志歩・鈴木真理子

Camera Trap Survey of Mammals and Birds in the Amami Islands

FUJITA Shiho¹ and SUZUKI Mariko²

1: 鹿児島大学共通教育センター

2: 鹿児島大学国際島嶼教育研究センター

1: Center for General Education, Kagoshima University,

2: International Center for Island Studies, Kagoshima University

要旨

奄美大島および徳之島の原生的照葉樹林における中大型脊椎動物の生息状況を把握することを目的に、カメラトラップによる調査を行なった。その結果、両島は多数の固有種を含む哺乳類および鳥類の生息地となっていることが確認された。

はじめに

渡瀬線と蜂須賀線の間位置する奄美群島と沖縄諸島は、約150万年前にユーラシア大陸から隔離され (Osozawa 2012)、独自の進化を遂げた「遺残固有種」と呼ばれる生物種が多く存在する。さらに、それらのほとんどの種は分布域が狭く、また開発などの影響により存続が危ぶまれている (環境省 2017)。本調査は、奄美大島および徳之島において、比較的まだ調査の行われていない原生的森林内の哺乳類・鳥類の生息状況を把握することを目的とした。

材料と方法

奄美大島2カ所 (神屋、湯湾岳) および徳之島2カ所 (三京、井之川岳) の原生的森林内に観察地点を設け、2017年1月27日から9月21日までカメラトラップによる調査を行なった。各観察地点の斜面上にできるだけ標高差のない直線調査路を設定し、各地点につき6台の赤外線自動撮影カメラ (Ltl-6210MC 850NM, Ltl Acorn Electronics) を100mおきに地上約60cmの高さで設置した。各観察地点の標高は神屋400m、湯湾岳590m、三京220m、井之川

岳 470 m であった。撮影条件はビデオモードで 30 秒間とし、インターバルを 5 分間とした。

結果と考察

各観察地点におけるカメラ延べ稼働日数は神屋 1328 日、湯湾岳 1078 日、三京 1398 日、井之川岳 1105 日であった。分類群ごとの総撮影動画数は、哺乳類（ヒトを除く）1361、鳥類 1298、爬虫類 2、昆虫 3、不明 78 であった。撮影頻度（カメラ・日あたりの撮影回数）は奄美大島 2 地点に比べ、徳之島 2 地点の方が高かった（神屋：0.57、湯湾岳：0.37、三京：0.72、井之川岳：0.82）。そのうち哺乳類の撮影頻度は井之川岳で最も高く（0.49）、次いで神屋（0.28）、湯湾岳（0.27）、三京（0.11）の順に高かった。鳥類の撮影頻度は三京で最も高く（0.45）、次いで井之川岳（0.30）、神屋（0.17）、湯湾岳（0.10）の順に高かった。

撮影された種は、哺乳類ではリュウキュウイノシシ *Sus scrofa riukiuanus*、アマミノクロウサギ *Pentalagus furnessi*、アマミトゲネズミ *Tokudaia osimensis*、トクノシマトゲネズミ *Tokudaia tokunoshimensis*、ケナガネズミ *Diplothrix legatai*（以上、いずれも奄美群島固有種）、その他ネズミ科 *Muridae*（種不明）、トガリネズミ科 *Soricidae*（種不明）、イヌ *Canis familiaris*、ネコ *Felis catus* であった。アマミノクロウサギとリュウキュウイノシシは全ての観察地点で撮影された。また、アマミノクロウサギは、それぞれの島で標高の高い湯湾岳および井之川岳の方が神屋および三京よりも 3~6 倍高頻度で撮影された。リュウキュウイノシシは奄美大島より徳之島の方が高頻度で撮影され、とくに井之川岳で頻度が高かった。アマミノクロウサギ、アマミトゲネズミ、トクノシマトゲネズミ、ケナガネズミはいずれも環境省レッドリストにおいて絶滅危惧 IB 類に指定されている。また、徳之島のリュウキュウイノシシ個体群は絶滅のおそれのある地域個体群として記載されている。鳥類は少なくとも 17 種が撮影され、奄美群島固有種（亜種）であるアマミヤマシギ *Scelopax mira*、ルリカケス *Garrulus lidthi*、オーストンオオアカゲラ *Dendrocopos leucotos owstoni*、オオトラツグミ *Zoothera major* が含まれた。このうちアマミヤマシギは全ての観察地点で撮影されたが、他の 3 種は奄美大島でのみ撮影された。外来種については、頻度は低いものの、イヌは井之川岳で 5 回（0.0045 回／カメラ・日）、三京で 1 回（0.0009 回／カメラ・日）、ネコは湯湾岳で 2 回（0.002 回／カメラ・日）撮影された。緊急対策外来種かつ特定外来生物に指定され（環境省 2015）、奄美大島で生息が確認されているフイリマンゲース *Herpestes auropunctatus* は今回撮影されなかった。

以上のように、奄美大島、徳之島における原生的照葉樹林は、多数の固有種を含む哺乳類および鳥類の生息地となっていることが確認された。また、捕食性外来種（イヌおよびネコ）の生息も確認されたことから、両島における固有希少種の保護を考える上でも継続してモニタリング調査が必要である。

引用文献

- 環境省 2015. 我が国の生態系等に被害を及ぼすおそれのある外来種リスト（生態系被害防止外来種リスト）
- 環境省 2017. 絶滅のおそれのある野生生物の種のリスト（環境省レッドリスト 2017）
- Oozawa, S., SHINJO, R., ARMID, A., WATANABE, Y., HORIGUCHI, T., WAKABAYASHI, J., 2012. Palaeogeographic reconstruction of the 1.55 Ma synchronous isolation of the Ryukyu Islands, Japan, and Taiwan and inflow of the Kuroshio warm current. *International Geology Review* 54: 1369-1388.